

## 共に学び合える教室を目指して

—サスカチュワン大学における日本語講座実践をとおして—

クラスナイ いづみ

### 要 旨

私は現在、サスカチュワン大学で日本語を教えている。本校の日本語講座は2014年9月から始まった新しい講座である。この2年間は正に手探りで、ここでどのような日本語講座を作り上げていけばよいのかということを探る日々であった。

本稿では開講当初の様子、どのような日本語講座を目指してきたのか、そして3年目を迎えた今、どのような成果が見えてきたのかについて述べる。

### キーワード

カナダ 日本語講座の役割 学習者同士の学び 学習者中心

## 1. はじめに

サスカチュワン州はカナダのほぼ中央に位置し、カナダ有数の穀倉地帯です。大平原と青い空がどこまでも広がる、そんな風景を想像してみてください。夏の景色は素晴らしいのですが、冬は寒気が入り込むと、零下40度にもなる極寒の地です。州全体の人口は約110万人です。州最大の都市はサスカトゥーンで、こちらの人口は約22万人。人口の約10パーセントが学生の大学街です。ここに私が勤務するサスカチュワン大学があります。

私は2007年からサスカトゥーンに住んでいますが、その頃はまだ大学に日本語のクラスがありませんでした。当時、私は日本語補習校や高校の日本語の代用教員、プライベートレッスンなどで日本語を教えていましたが、日本語を学びに来る生徒は、他の国の日本語学習者と同様に、アニメやテレビゲームに親しんできた日本のポップカルチャーファンが大多数。サスカトゥーン市内で、日本語を習える数少ない場所として、生徒達は補習校や高校に足を運んできていました。しかし彼らが高校を卒業した後、市内に日本語を学べる機関はなく、日本語学習者や日本語教育関係者は皆、大学で日本語講座が開講されることを切望していました。そんな多くの人達の期待を受け、2014年9月に日本語講座が開講されることになりました。

## 2. 日本語講座の新設

本校の日本語講座は、言語学・宗教学科が開講する選択科目としてスタートし、この2年と3ヶ月の間に5講座が開講されました（詳細は次頁表1）。初年度の初級日本語1の定

員は45名でしたが、7月には既に定員がいっぱいになっていました。あと2週間ほどで新学期が始まるという8月中旬頃から、毎日のように学生からメールが来始めました。どうしても日本語を勉強したいので、クラスに入れてほしいというものでした。私は数人ならいいだろうと思い許可したのですが、学生のメールは毎日のように来続けました。

新学期初日。私にメールをせず直接教室に来た学生もいて、教室には学生が溢れていました。ここまで日本語を学びたい学生がいることは本当に嬉しいことでしたし、できるだけ多くの学生に学ぶ機会を与えたいと思いました。連絡をくれた学生のみ先着で受け入れることにし、他は来学期以降に取ってもらうことにしました。結局58名が登録し、最終的に51名となりました。

表1 開講講座と登録者数(2016年12月現在)

	2014-2015年度(登録者数)	2015-2016年度	2016-2017年度
1学期	初級日本語1(51) ポップカルチャーと映画(30)	初級日本語1(50) 中級日本語1(36)	初級日本語1(49) 中級日本語1(24) ポップカルチャーと映画(25)
2学期	初級日本語1(52) 初級日本語2(36)	初級日本語1(50) 初級日本語2(40) 中級日本語2(27)	初級日本語1(45) 初級日本語2(44) 中級日本語2(19)(予定)
春期・ 夏期 集中講座	初級日本語1(46) 初級日本語2(20) ポップカルチャーと映画(19)	初級日本語1(42) 初級日本語2(18)	初級日本語1 初級日本語2 (予定)

### 3. どんな日本語講座を目指すのか

#### 3.1 日本語講座の役割

開講にあたり私が考えていたことは、日本語講座は学生たちに何を提供できるのかということでした。日系人人口が100人ほどのこの街では、実際に日本語を使ったり、日本の文化に直接触れたりする機会はほとんどありません。日本語に興味を持っているけれど、一人でどうやって勉強したらいいのかわからないという学生もいました。

教室に来れば同じ興味を持った仲間と出会い、情報交換ができます。そして実際に日本語を使ったり、日本のことを学んだりできる。日本語講座はそんな役割を果たす場所であってほしいと考えました。

#### 3.2 学生同士が学び合える環境

サスカチュワン大学で初めて日本語が開講された日、私は最初の授業で次のことを学生に伝えました。日本語を学ぶのは私からだけではなく、クラスメートからも学ぶことができるということ。また、日本に興味を持ったきっかけ、そして日本語を学ぶ目標を、クラスメートと一緒に共有してほしい。中には既に少し日本語を知っている学生もいるかもしれないし、日本語でなくとも既に他の外国語を学び、外国語学習に長けている学生もいるでしょう。そういう人達の勉強方法を参考にして、共に学び合ってほしい。そして日本語

という共通の目的を通して、いい友達を作ってほしいと伝えました。

日本語講師は私一人ですが、TA がいません。そこでクラスリーダーを決め、配布物を配ったり、班分けをしたりするなど、授業の補佐をお願いしました。初学期のクラスでは、リーダーが中心となって、スタディーグループを開き、試験前に自主的に勉強するという姿も見られました。

### 3.3 学習者中心の授業

#### 3.3.1 ペアワーク、グループワークを多く取り入れる

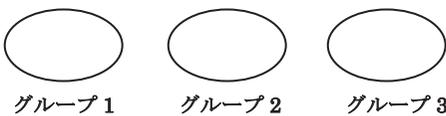
授業中は、できるだけ教師が話す部分を簡潔に手短にし、学生同士のペアワークやグループワークを多くしました。私の説明が終わり、「はい、ではペアワークに移ってください」と言うと、ハツとして、「え、何をやるの?」と慌てだす学生がいつもいることから、私一人が一方向的に話していても、あまり学生の耳には届いていないことがわかります。全体に「質問は?」と投げかけても、あまり出てこないのですが、活動中に教室を回っていると、色々な質問が出てきます。実際自分で日本語を話したり使ったりしながら、試行錯誤していると、より多くの質問が出てくるのです。中にはシャイな学生もいて、口を開かないで一人で教科書を読んでいる学生も何人かいます。そういう学生にはグループに入るように促すのですが、なかなか自分から入っていきません。こうした学生をグループに上手に取り込んでいくことが、毎回課題だと感じています。

#### 3.3.2 プレゼンテーション

最初の年はプレゼンテーションという形は取っておらず、学生に音声録音してファイルで送ってもらい、それを私が評価していました。しかし、この方法では学生の顔が見えず、臨場感が出ない。そして何よりも私一人だけがプレゼンを聞くのはもったいないと思いました。学生同士が発表を聞き合うことで、お互い多くのことが学べると思いました。

実際その通りで、プレゼンテーション形式にしてから、この活動を楽しみにしている学生もいますし、プレゼンテーションになると生き生きとする学生もいます。その反面、苦手でやりたくないという学生もいますが、人前で日本語を話す経験を通して自信をつけて

表 2 プレゼンテーション要領 (初級日本語 1)

種類	スキット	スピーチ
時期	学期の中頃	学期の終盤
実施要領	2, 3人で1グループを作る。 (50人の場合、17-18グループができる。) 発表時間は約2分。	全体を3つのグループ(17人~18人)に分ける。  グループ1      グループ2      グループ3 プレゼンテーションはグループ毎に同時に行う。発表時間は約2分。学生は自分のグループのみを評価。教師もいずれか一つのグループに入り、評価。教師が入らなかった残り二つのグループの学生は、別に教師とアポイントを取り、再度プレゼンテーションを行う。
評価方法	ルーブリックを使い、教師だけでなく学生もお互いに評価する。	

いく学生もいるので、今では外せない活動になっています。初級日本語1には、毎学期50人ほどの学生がいます。この人数でプレゼンテーションを行うのは、時間的な制約などもあり大変なのですが、試行錯誤をしながら、前頁表2の要領で行うようになりました。

#### 4. 3年目を迎えた日本語講座

開講当初、初級日本語1には50人以上の登録がありました。新設講座であるための目新しさのせいではないかと思っていましたが、ありがたいことに3年目を迎えた今でも、登録者数にあまり変化はありません。今はクラス数も増え、1学期に100人前後の学生が日本語を登録しています。上のレベルに行くにつれて、登録人数は少なくなっていくのですが、その分お互いに話しやすい雰囲気ができ、クラスの仲が良くなっていくようです。教室の外で留学生とカナダ人学生が日本語で話す場面も見られ、とても微笑ましく感じます。

2年間の学習を終えた学生の中には、日本語学科の設立を希望する学生もいます。しかし、外国語を主専攻とするプログラムを作るのは難しい状況にあります。本学で開講されている外国語のクラスにおいて、登録する学生数が全体的に減っているからです。将来的には日本の姉妹校と連携し、更に日本語を学びたい学生には、日本で学べる機会が増えることを期待しています。

#### 5. 大学の授業を終えた学生たち

大学での日本語の授業を履修し終えた学生は、その後、どうしているのでしょうか。その後、何もしていないという学生もいると思いますが、実際、私に連絡を取り、何かの形で繋がろうとしている学生もいました。

##### 5.1 ボランティアで日本語のクラスに参加する

何人かの学生は、後輩達が学習しているクラスでボランティアとして授業に参加し、後輩学生と一緒にペアワークやグループワークをやっています。日本語を忘れたくない、授業を聞いて復習したいという理由からですが、実はこれは後輩たちにもいい刺激を与えています。2年経つと自分達もこのようになれるという手本を見ることができるからです。決して雲の上の存在ではなく、自分達と同じ大学の学生の2年後の姿を見ることで、後輩学習者は身近な目標ができるようです。

##### 5.2 地元の日本人会との交流

8月にサスカトゥーン市ではフォークフェスティバルという各国の文化を紹介するイベントが開かれます。この夏、日本のブースも参加することになり、日本人会が中心となってボランティアを募集していました。日本語の学生に声をかけてみたところ、8人の学生が申し出てくれました。

そのうちの一人からイベント後に、メールが来ました。「いい経験になった。日本の人達と話がしたいから、もっと日本語を勉強したいと思った。最初に日本語を取ろうと思った

理由は、いい成績を取るのではなく、日本人と話したいからだった。ボランティアをして、最初の目的を思い出した」というものでした。何が学生を刺激するのか、わからないものです。学生に声をかけて本当に良かったと感じた出来事でした。

### 5.3 日本を目指す学生たち

この2年間で、JETプログラムや民間の英会話教師を目指して日本に旅立って行った学生は、私の知る限り4名います。日本の生活が忙しいようで、なかなか便りをもらえないのですが、時々日本の様子を知らせてくれるよう頼んでいます。彼らを知る学生がいるクラスでは、その様子を知らせ、同じ夢を持った学生の励みとしています。

今学期も4通ほど推薦書を頼まれました。皆の夢がかないますように。そんな願いを込めながら、いつも推薦書を書いています。

## 6. おわりに

今年もまた、サスカチュワンに冬がやってきました。この時期は気温が一気に下がり、日照時間が短くなるため、普通の生活を送るのが大変になってきます。その影響もあってか、授業に来る学生が減ってくるのもこの時期です。私もこの時期はなかなか気分が上がらず、毎年苦勞しています。それでも日本語の教室に入るとスイッチが入ります。懸命に日本語学習に取り組む学生の姿に心を打たれ、勇気づけられることもあります。教師は学生からたくさんのことを学び、感動をもらっています。

インターネットやオンライン授業などの登場で、将来的に教師という仕事なくなるのではないかという意見が昨今聞かれます。しかし、私が教えているデジタル世代の学生達は、実際に日本語を話し、人とコミュニケーションができる場所を求めて教室に足を運んでいます。ITと昔ながらの教室は相反するものではなく、共存しながらお互いの足りない部分を補い合うものなのではないでしょうか。いつの時代でも教師と学生、そして学生同士の繋がりはとても大切で、そのような関係が築かれる限り、教師の仕事はITに取ってかわられることはないと思っています。これからも、生身の人間同士が触れ合う教室という空間を大切にしながら、学生に愛される日本語講座を目指して精進していきたいと思っています。

### 参考文献

クラスナイいづみ (2016) 「サスカチュワン大学日本語講座2年間の歩み」『2016 CAJLE (Canadian Association for Japanese Language Education) Annual Conference Proceeding』 pp. 154-161

(くらすない いづみ サスカチュワン大学教養学部)